

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第98集

加茂ハイタノクボ遺跡Ⅱ

県道宮ノ口深淵線緊急地方道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2007.3

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

加茂ハイタノクボ遺跡Ⅱ

県道宮ノ口深淵線緊急地方道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2007.3

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

序

加茂ハイタノクボ遺跡が位置する香美市土佐山田町は県下でも有数の遺跡が集中する地域です。本遺跡は急峻な山間部より流れる物部川が平野部に向かって急激に開ける場所に立地する素晴らしい環境に恵まれています。

これまでに行われた試掘調査で古代の瓦が出土しており、窯業関連遺跡であることが知られています。これらの瓦は香川県の古代寺院との関係が指摘されており、古来より広く物や文化の交流が行われていたことが窺われます。また、今回の調査ではこれまで確認されていなかった弥生時代や平安時代の遺物も出土しており、さらに遺跡の広がりを感じさせます。今回の調査成果が地域の歴史資料として、また、広く一般に活用され、埋蔵文化財保護の一助となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、本書の刊行にあたりまして御協力頂いた地元の皆様方、また、発掘調査に携わって頂いた作業員の方々に厚く御礼申し上げます。

平成19年3月

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
所長 川島 博海

例言

1. 本書は県道宮ノ口～深淵線整備計画に伴う発掘調査報告書である。2000年に土佐山田町教育委員会が実施し、報告された『加茂ハイタノクボ遺跡』に原因を同じくするものであり、調査区は隣接する。
2. 加茂ハイタノクボ遺跡の所在地は、高知県香美市土佐山田町加茂である。
3. 調査期間ならびに発掘調査面積は次のとおりである。
平成16年度
試掘調査 調査期間：平成16年10月18日～同年10月27日 調査面積：32㎡
平成17年度
試掘調査 調査期間：平成17年10月17日～同年10月18日 調査面積：26㎡
発掘調査 調査期間：平成17年10月17日～同年10月24日 調査面積：12㎡
4. 発掘調査及び整理作業は、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが高知県中央東土木事務所(旧高知南国土木事務所)の委託を受け、これを実施した。調査体制は以下のとおりである。
調査事務 戸梶友昭 (財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター・総務課長)
池野かおり(財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター・主幹)
長谷川明生(財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター・主任)
調査総括 横山耿一 (財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター・調査課長)(平成16年度)
森田尚宏 (財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター・調査課長)(平成17年度)
廣田佳久 (財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター・調査課長)(平成18年度)
調査担当 藤方正治 (財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター・第四班長)
徳平涼子 (財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター・主任調査員)
5. 本書の編集と執筆は第Ⅰ章4(1)、第Ⅲ章1(1)を藤方が担当し、以外は徳平が担当した。
6. 遺構等の名称については、P(柱穴及びピット状遺構)、TP(試掘坑または調査坑)、TR(トレンチ)等の略号を使用した。
7. 遺物実測図の縮尺は土器・土製品、瓦、石製品について、適宜1/3と1/4を用いた。遺物番号は通し番号であり、挿図及び写真図版中の番号と遺物番号は一致している。
8. 層序や出土遺物の色調等については一部で『新版標準土色帖1997年後期版』の名称を使用した。

9. 遺跡の測量は、世界標準測地系に則って行い、挿図中の北は原則として座標北である。また、挿図中の標高は海拔高を示す。
10. 発掘調査に際しては、地元の土佐山田町加茂地区をはじめとして香美市内にお住まいの方々に全面的な御協力と御理解を得ることができ、調査を円滑に進めることができた。記して衷心より謝意を表します。
11. 発掘調査及び報告書の作成に際しては、高知県教育委員会、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターの諸氏から御助言や御協力を得た。記して謝意を表します。
12. 試掘調査にかかる掘削作業においては、有限会社石丸建材の御尽力を頂いた。
13. 発掘調査に伴う測量基準点の設置においては、有限会社新日本設計に委託して実施した。
14. 発掘作業及び整理作業に際しては次の方々に御尽力を頂いた。記して衷心より謝意を表します。
発掘作業：小松清一 小松悠悦 溝淵進一郎 吉川誠喜 吉川徳子
整理作業：宮本幸子 橋田美紀 入野三千子 竹村延子
15. 遺跡の略号は下記のとおりとし、出土遺物の注記にはこれを用いた。
04－10YH（平成16年度試掘調査）
05－15YK（平成17年度試掘調査・本調査）
16. 出土遺物は、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

第Ⅰ章 調査の契機と経過

1. 調査の契機と経過	1
2. 調査の方法	2
3. 調査の概要	3
4. 調査日誌抄	3
(1) ハイタノクボ地区, 鳴滝地区試掘調査	3
(2) シカソノ地区試掘調査	3
(3) 鳴滝地区本調査	4

第Ⅱ章 遺跡の環境

1. 地理的環境	5
2. 歴史的環境	5

第Ⅲ章 調査の成果

1. 試掘調査	9
(1) 平成16年度	9
(2) 平成17年度	15
2. 本調査	16
(1) 基本層序	16
(2) 堆積層出土遺物	17
(3) 遺構と遺物	19
(4) まとめ	19

挿図目次

図 1	香美市位置図(300万分の1)	1
図 2	調査区位置図(S = 1/2,000)	2
図 3	発掘調査風景1	3
図 4	発掘調査風景2	3
図 5	加茂ハイタノクボ遺跡周辺の遺跡分布図(S = 1/50,000)	6
図 6	平成16年度 試掘坑位置図(S=1/1,000)	11
図 7	平成16年度 試掘坑柱状図(S=1/40)	12
図 8	平成16年度 試掘調査出土遺物	13
図 9	シカソノ地区 TR-1北壁セクション図	15
図10	セクション図	16
図11	第X層出土遺物実測図(須恵器・土師質土器)	17
図12	第XI層出土遺物実測図(須恵器・土師質土器・土師器・陶器・磁器)	18
図13	第XI層出土遺物実測図(瓦)	19
図14	第V層遺構平面図	19
図15	第XI層遺構平面図	20

表目次

表 1	遺跡一覧表	7
表 2	出土遺物観察表 1	21
表 3	出土遺物観察表 2	22
表 4	出土遺物観察表 3	23

図版目次

- PL1 上:ハイタノクボ地区試掘調査前遠景(南から)
中:鳴滝地区試掘調査前遠景(北西から)
下:TP-1東壁(西から)
- PL2 上:TP-3西壁(東から) 中:TP-3南壁(北から) 下:TP-4北壁(南西から)
- PL3 上:TP-5北壁(南西から) 中:TP-5南壁(北東から) 下:TP-6北壁(南から)
- PL4 上:TP-6北壁(南東から) 中:TP-7北壁(南西から) 下:TP-7北壁(南から)
- PL5 上:TP-8北壁(南から) 中:TP-8南壁(北東から) 下:TP-7・8埋め戻し後(南から)
- PL6 鳴瀧地区試掘調査出土遺物1
- PL7 鳴瀧地区試掘調査出土遺物2
- PL8 鳴瀧地区試掘調査出土遺物3
- PL9 鳴瀧地区試掘調査出土遺物4
- PL10 鳴瀧地区試掘調査出土遺物5
- PL11 上:本調査遺構完掘状態1(南東より) 下:本調査遺構完掘状態2(北東より)
- PL12 上:本調査南壁セクション(北より) 下:本調査中央バンクセクション(南より)
- PL13 上 左:シカソノ地区TR-1設定状態(南より) 右:シカソノ地区TR-1完掘状態(南より)
中上 左:本調査調査前風景(南より) 右:本調査P-1検出状態(北東より)
中下 左:本調査P-1半掘状態(東より) 右:本調査P-2検出状態(西より)
下 左:本調査P-2完掘状態(北より) 右:東壁セクション(北西より)
- PL14 須恵器(杯),近世陶器(皿),近世磁器(碗),瓦(平瓦・丸瓦)
- PL15 須恵器(杯),土師質土器(杯・碗・甕)

第Ⅰ章 調査の契機と経過

1. 調査の契機と経過

県道宮ノ口深淵線は香美市土佐山田町東部の宮ノ口から物部川を通り、香南市野市町の市街地へ至る主要道路であり、物部川左岸を通る唯一の幹線道路でありながら、多くの部分では道幅が狭く、日常生活はもとより物流の主たる大型車両や緊急車両の通行に困難を来す場合が多い。この道路が整備されることで、安芸、室戸などの県東部地域から土佐山田町域、とりわけ産学振興のために設置された高知工科大学や史跡天然記念物である龍河洞等へ至る最短距離となることなどから整備事業が計画され、平成9年には高知工科大学前が部分開通しており、現在農林合同庁舎付近までの部分開通に向けて事業が進められている。

県道の整備計画区域内には林田遺跡や加茂ハイタノクボ遺跡、林田シタノヂ遺跡、山本前田窯跡など縄文時代から古代・中世に至る遺跡が所在し、平成11・12・16年にはこの整備事業に伴い、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターによって林田遺跡の発掘調査が行われている。⁽¹⁾

今回、調査対象地となった加茂字ハイタノクボは古くより瓦が採集されることが知られており、平成8年に土佐山田町教育委員会によって試掘調査が行われ、コンテナケース2箱分の瓦が出土している。平成10年には県道宮ノ口深淵線の整備事業が計画され、遺物発見地の約半分が削平を受けることになり、遺物発見地を加茂ハイタノクボ遺跡と命名し、試掘調査が行われ、報告書が刊行されている。⁽²⁾ また、平成16年には平成10年に試掘調査を行っていない部分について、加茂ハイタノクボ遺跡の広がりや遺構の残存状況を把握するため、高知県埋蔵文化財センターによって試掘調査が実施された。試掘調査の結果、加茂字鳴滝で弥生土器や古代から近世にかけての遺物が多く出土し、平成17年度に本発掘調査を行うこととなった。平成17年には平成16年度に試掘調査を行っていない加茂字シカソノにおいても試掘調査を行った。

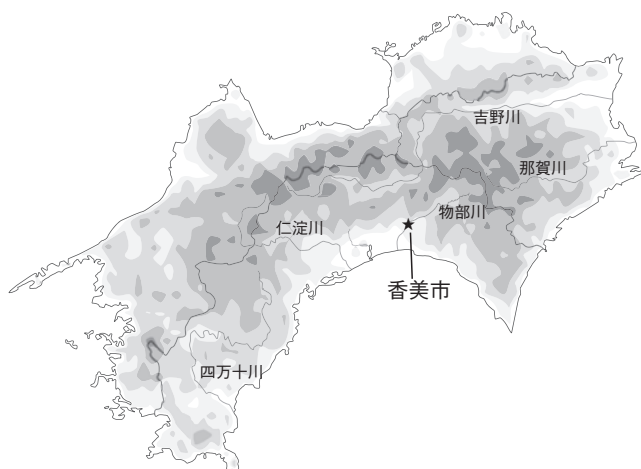


図1 香美市位置図(300万分の1)

2. 調査の方法

2. 調査の方法

平成16年度に行った試掘調査は、調査対象地の8箇所に3×3mまたは2×1mのトレンチを設定した。平成17年度行った試掘調査は、調査対象地に4×1.5mのトレンチを設定した。

調査地は重機の搬入が困難な場所に位置していたため、土層の掘削、遺構の調査、埋戻しは平成16年度に行った試掘調査の一部(TP1)を除き人力で行った。本調査は調査面積が狭く、廃土を置く場所がないため借地に置いた。調査中は遺物出土状態や遺構の写真撮影及び実測を必要に応じて行った。

試掘調査は平成16年10月18日～10月27日(ハイツノクボ地区、鳴滝地区)平成17年10月17日～10月18日(シカソノ地区)、本発掘調査は平成17年10月18日～10月24日に行い、試掘と本掘の実働は14日であった。調査面積は試掘調査が26㎡、本調査が12㎡であった。



図2 調査区位置図 (S = 1/2,000)

3. 調査の概要

平成16年度の試掘調査では6箇所のトレンチで遺物包含層を確認し、鳴滝地区の一部において本発掘調査を行うこととなった。平成17年度の本発掘調査では遺物包含層から弥生土器と古代から近世にかけての多く遺物が出土し、近世以降の整地層と判断された。

平成17年度のシカソノ地区の試掘調査は、現況は段々畑となっており、上層は著しく削平を受け、地表下約20～40cmで地山が確認された。遺物は弥生土器片1点がみられたが、流れ込みによるものとみられ、遺物包含層、遺構共に確認されず、試掘調査を行った地点については本調査は必要ないものと判断された。

4. 調査日誌抄

(1) ハイタノクボ地区, 鳴滝地区試掘調査

平成16年

10.18 (月) 掘削用の重機搬入。TP1の調査を行う。表土下の比較的浅い部分で地山(黄色砂礫層)が検出される。

10.19 (火) TP2の調査を行う。既に多くの部分で攪乱を受けており、新しい瓦等の建築材が廃棄されていた。

10.20 (水) TP3の調査を行う。人力により試掘坑の掘削を行う。

10.21 (木) TP3で地山(黄灰色粘土)の上面を確認する。TP3の堆積状態を記録し、埋め戻しを行う。

10.22 (金) TP4・5の調査を行う。試掘坑の底部で段丘構成層(灰色シルトまたは粘土層)を検出する。堆積状態を記録する。

10.25 (月) TP6・7の調査を行う。試掘坑を段丘構成層(灰色粘土または砂礫層)まで掘削し、堆積状態を記録する。

10.26 (火) TP8の調査を行う。掘削を段丘構成層(灰色砂礫層)まで行い、堆積状態を記録する。各試掘坑の埋め戻しを行う。

10.27 (水) 各試掘坑の位置、標高等を記録する。

(2) シカソノ地区試掘調査

平成17年

10.17 (月) トレンチを設定し、掘削を開始する。

10.18 (火) 遺構、遺物包含層は確認できず、測量を行い、埋め戻しを行う。

(3) 鳴滝地区本発掘調査

平成17年



図3 発掘調査風景1



図4 発掘調査風景2

4. 調査日誌抄

- 10.17 (月) 草刈りを行い, 表土層の掘削を開始する。
10.18 (火) 第Ⅱ・Ⅲ層の掘削を行う。
10.19 (水) 第Ⅳ～Ⅶ層の掘削を行う。第Ⅵ層で近世のピットを確認する。
10.20 (木) 第Ⅷ～Ⅺ層の掘削を行う。
10.21 (金) 完掘状態の写真撮影, 測量を終了し, 埋め戻しを開始する。
10.24 (月) 埋め戻しを終了し, すべて完了する。

註

- (1) 財高知県文化財団埋蔵文化財センター 2002『林田遺跡Ⅰ－緊急地方道整備事業による県道宮ノ口深淵線改良工事に伴う林田遺跡発掘調査報告書』高知県埋蔵文化財センター報告書第71集
(財高知県文化財団埋蔵文化財センター 2002『林田遺跡Ⅱ－緊急地方道整備事業による県道宮ノ口深淵線改良工事に伴う林田遺跡発掘調査報告書』高知県埋蔵文化財センター報告書第76集
(財高知県文化財団埋蔵文化財センター 2005『林田遺跡Ⅲ－県道宮ノ口深淵線緊急地方道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』高知県埋蔵文化財センター報告書第92集
(2) 土佐山田町教育委員会 2000『加茂ハイタノクボ遺跡－県道宮ノ口～深淵線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』

第Ⅱ章 地理的・歴史的環境

1. 地理的環境

加茂ハイタノクボ遺跡が所在する香美市土佐山田町は平成18年3月に香北町、物部村と合併し、香美市となった。香美市は高知県下最大の穀倉地帯である香長平野の北東部に位置し、県都高知市から約15kmの距離にある。面積538km²を有し、その約9割は森林が占める。県下第3位の川である物部川流域に位置し、年間降水量の多い地域でもある。物部川は剣山山系の白髪山を源流とし、中上流域にかけては急峻な山地に囲まれた峡谷をほぼ南西に流れ、流路に沿った上流への道は古来阿波国への最短ルートとして知られている。物部川に沿う山間部は河岸段丘が発達し、土佐山田町神母の木付近で流路を南に変える。下流域は山間部から急激に開けた扇状地である香長平野を南流して土佐湾に注いでいる。土佐山田町加茂は物部川河口から12km上流に位置し、物部川下流域に形成された低位段丘上に立地する。周辺の遺跡の多くは段丘上の平坦面に所在し、西は物部川により形成された段丘崖、東は大峰山－烏ヶ森山系よりなる山地であり、東西は山裾に発する湧水を集めた小規模な河川によって刻み込まれた谷や段丘崖によって画される。

また、対岸の土佐山田町の市街地は長岡台地と称される洪積台地上に位置し、南に隣接する南国市とともに県下でも極めて多くの遺跡が集中する地域である。

2. 歴史的環境

物部川流域の歴史は後期旧石器時代まで遡ることができる。旧石器時代の遺跡は少なく、発掘調査が行われた遺跡は皆無である。物部川右岸に位置する佐野楠目山遺跡では角錐状石器が十数点採取されているほか、中流域の長野南遺跡では旧石器時代の可能性のある石器が採取されている。

縄文時代の遺跡は早期に出現する。中流域の香美市美良布遺跡⁽¹⁾では厚手無文土器が出土している。最近の調査では香美市刈谷我野遺跡⁽²⁾で集落が確認されており、遺物がまとまって出土している。前期の遺跡は物部川流域では少なく、香長平野北端の山麓に位置する南国市栄エ田遺跡などで少量の遺物が出土している。中期の遺跡も少ないが、香美市林田シタノヂ遺跡では土坑より中期末の遺物が出土しているほか、下流域の南国市田村遺跡群⁽³⁾では舟元式土器が出土している。後期になると県下でも遺跡数が増加し、香長平野では田村遺跡群、栄エ田遺跡などで遺物が出土している。田村遺跡群では後期中葉の片粕式土器とともに多量の打製石斧や石錐が出土しているほか、鐘崎式土器も出土している。晩期には美良布遺跡で土坑を確認しており、また栄エ田遺跡や林田シタノヂ遺跡では突帯文土器が出土している。

弥生時代になると香長平野では県下でも遺跡が集中する。田村遺跡群では前期初頭の松菊里型住居を含む集落が確認されているほか、大陸系磨製石器や初期の遠賀川式土器などが出土している。中期から後期にかけても集落は存続し、特に中期後葉から後期前半にかけては竪穴式住居400棟以上、掘立柱建物跡200棟以上が確認されており、拠点集落として盛況期を迎える。この時期には周辺においても集落が増加し、物部川左岸の香南市下ノ坪遺跡⁽⁴⁾や上岡遺跡のほか本村遺跡など丘陵や

2. 歴史的環境

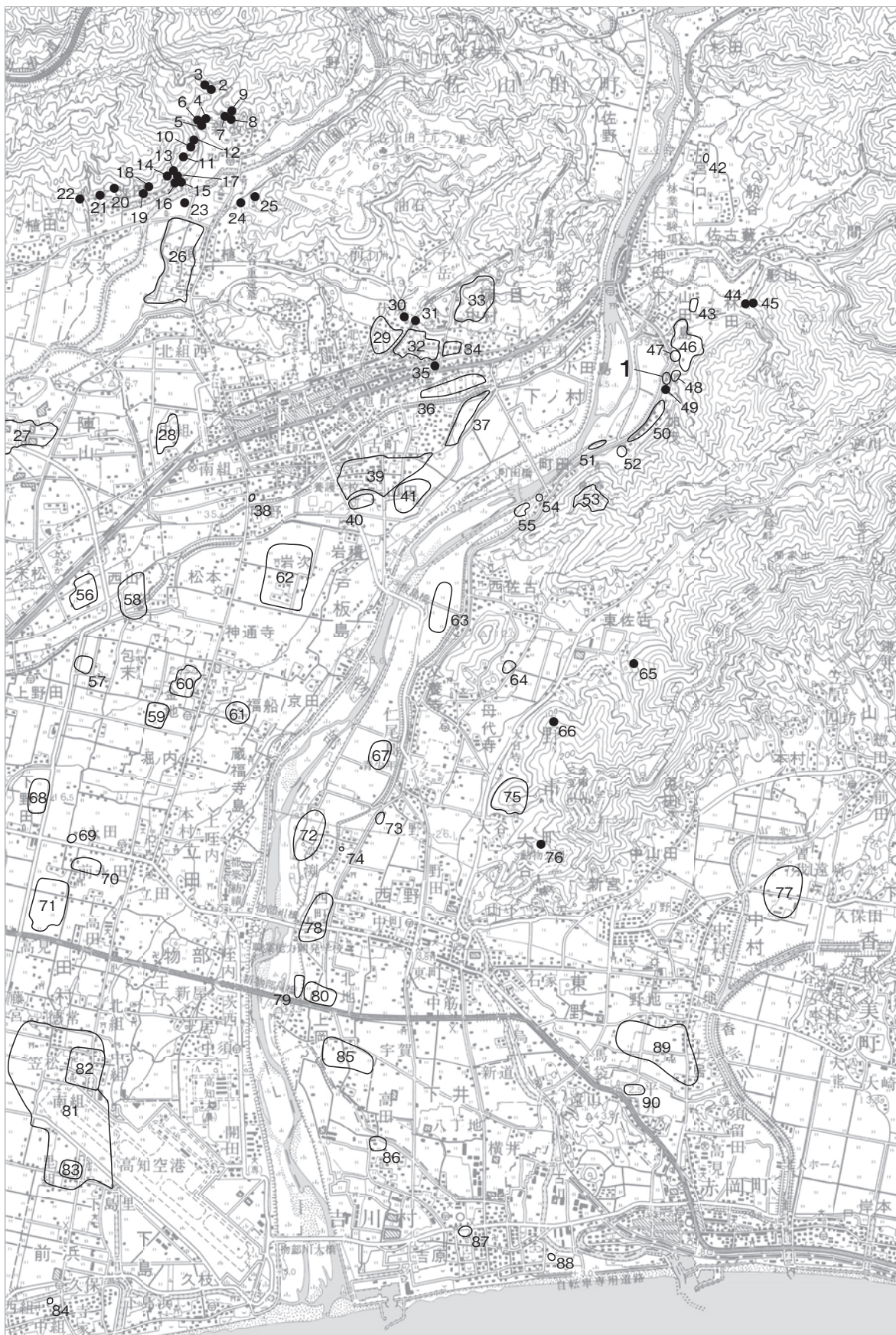


図5 加茂ハイタノクボ遺跡周辺の遺跡分布図 (S=1/50,000)

山腹にも集落が出現する。また、この地域の青銅器は銅鐸と中広形・広形銅矛が混在して出土するという特徴がみられる。弥生時代後期後半になると田村遺跡群が突然消滅し、内陸部には加茂ハイタノクボ遺跡の近隣に位置する林田遺跡⁽⁵⁾や対岸のひびのきサウジ遺跡、岩村遺跡群、金地遺跡、小籠遺跡、東崎遺跡など遺跡数が飛躍的に増加するが、多くの遺跡は古墳時代初頭には終焉を迎える。

古墳時代の集落は少なく、古墳が出現するのは後期からである。南国市や香美市の山麓部には横穴式石室を有する古墳がみられ、県下では最も密に分布し、加茂ハイタノクボ遺跡の周辺でも林田1号墳・2号墳が築かれている。対岸には一辺34mを測る方墳である伏原大塚古墳もみられる。

古代には国分川流域の土佐山田町須江や新改には窯跡が多く所在し、比江廃寺跡の瓦を焼成したとされるタンガン窯跡や土佐国分寺の平瓦を焼成した東谷窯跡などもみられる。今回の調査地である加茂ハイタノクボ遺跡では香川県善通寺や仲村廃寺出土の軒丸瓦と同範の軒丸瓦が出土しており、近隣には平安時代の窯跡とされる山本前田窯跡もみられる。また、物部川下流域の香長平野には条里地割が残っており、古代の遺跡が多くみられる。香南市に位置する下ノ坪遺跡⁽⁶⁾では大型の掘立柱建物跡などが確認されているほか、全国でも珍しい四仙騎獣八稜鏡や円面硯、緑釉陶器などが出土している。その他、香南市では郷家の存在が推定される曾我遺跡⁽⁷⁾や平安京大極殿や藤原氏の氏寺である法勝寺に使用された瓦を焼いたとされる亀山窯跡、二彩陶器の出土や瓦窯跡または工房跡

表1 遺跡一覧表

	遺跡名	時代		遺跡名	時代		遺跡名	時代
1	加茂ハイタノクボ遺跡	奈良～平安	31	小倉山古墳	古墳	61	岩村遺跡	弥生・中世・近世
2	東谷1号窯跡	奈良・平安	32	ひびのきサウジ遺跡	弥生～近世	62	大領遺跡	古墳～中世
3	東谷2号窯跡	奈良・平安	33	楠目城跡	中世	63	西佐古遺跡	平安・中世
4	小山田1号墳	古墳	34	ひびのき遺跡	弥生・古墳	64	亀山窯跡	平安
5	小山田2号窯跡	古墳・奈良	35	伏原大塚古墳	古墳	65	アゴデン白岩窯跡	平安
6	小山田3号窯跡	古墳・奈良	36	楠目遺跡	弥生～近世	66	溝渕山古墳	古墳
7	林ノ谷1号窯跡	古墳～平安	37	稲荷前遺跡	弥生～近世	67	深淵北遺跡	弥生～中世
8	林ノ谷2号窯跡	古墳～平安	38	黒土遺跡	弥生	68	横落遺跡	弥生～平安
9	林ノ谷3号窯跡	古墳～平安	39	原遺跡	弥生～近世	69	平杭遺跡	弥生・古墳
10	西ノ内窯跡	古墳	40	原南遺跡	弥生～近世	70	高添遺跡	弥生～平安
11	西ノ内1号墳	古墳	41	高柳遺跡	弥生～中世	71	修理田遺跡	弥生～平安
12	西ノ内2号墳	古墳	42	宮ノ口遺跡	古墳～平安	72	深淵遺跡	縄文～近世
13	椎山1号墳	古墳	43	シタノチ遺跡	古墳～平安	73	西上野遺跡	弥生
14	椎山2号墳	古墳	44	林田1号墳	古墳	74	深淵城跡	中世
15	新改2号墳	古墳	45	林田2号墳	古墳	75	大谷城跡	中世
16	新改3号墳	古墳	46	林田遺跡	弥生～中世	76	大谷古墳	古墳
17	新改4号墳	古墳	47	林田城跡	中世	77	曾我遺跡	弥生～中世
18	亀ヶ谷1号墳	古墳	48	日吉神社遺跡	平安	78	西野遺跡群	弥生・古墳・平安
19	亀ヶ谷2号墳	古墳	49	山本前田窯跡	平安	79	下ノ坪遺跡	弥生～平安
20	田村氏古墳	古墳	50	加茂遺跡	古墳～中世	80	北地遺跡	弥生
21	次郎ヶ谷西古墳	古墳	51	賀茂神社西遺跡	古墳～中世	81	田村遺跡群	縄文～近世
22	西久保古墳	古墳	52	加茂城跡	中世	82	田村城跡	中世
23	須江ツカアナ古墳	古墳	53	烏ヶ森城跡	中世	83	千屋城跡	中世
24	タンガン古墳	古墳	54	町田遺跡	弥生～中世	84	中屋敷遺跡	弥生
25	タンガン窯跡	飛鳥	55	町田堰東遺跡	縄文～中世	85	高田遺跡	平安
26	須江上段遺跡	古墳～近世	56	野村丸遺跡	弥生～平安	86	野口遺跡	弥生～中世
27	三島遺跡	弥生～平安	57	包末井ノ内遺跡	縄文・古墳～平安	87	浜口遺跡	弥生・古墳
28	山田三ツ又遺跡	古墳～平安	58	金地遺跡	弥生・平安・中世	88	住吉砂丘遺跡	弥生
29	伏原遺跡	弥生～平安	59	芝田遺跡	古墳～中世	89	東野土居遺跡	古墳～平安
30	鏡野学園古墳	古墳	60	垣添遺跡	古墳～中世	90	平井遺跡	古墳～平安

2. 歴史的環境

の遺構が検出された深淵遺跡⁽⁸⁾，南国市の田村遺跡群⁽⁹⁾では大型の掘立柱建物跡が確認されるなど官衙関連遺跡が多くみられる。

中世には山田氏が楠目城を拠点として領主制支配を行うが，天文年間には長宗我部氏に攻められて滅亡した。物部川右岸には山田氏が建立したとされる寺院跡である旧予岳寺跡⁽¹⁰⁾や高柳土居城跡，岩村遺跡群⁽¹¹⁾など多くの遺跡がみられる。高柳土居城跡や岩村土居城跡では堀跡が確認されており，高柳遺跡では12～13世紀の遺構も検出されている。加茂ハイタノクボ遺跡の周辺では林田遺跡で古代から中世のピット群が検出されており，白磁や青磁が出土している。また，林田城跡や烏ヶ森城跡などの城跡がみられるほか，山田氏に係る地名が多く残されており，「八幡」「御婆屋敷」「神ノ前」「前土居」「谷屋敷」「北ノ屋敷」などの小字がみられる。

近世には現在の市街地を中心に町作りが行われるようになり，物部川には野中兼山によって山田堰や用水路が築かれ，長岡台地の開発が進んだ。発掘調査では岩村遺跡群で屋敷地を囲む堀跡が検出されているほか，屋舗田丸遺跡⁽¹²⁾などでも遺物が出土している。

註

- (1) 香北町教育委員会 1991『美良布遺跡』香北町埋蔵文化財発掘調査報告書第2集
- (2) 香北町教育委員会 2005『刈谷我野遺跡Ⅰ－個人住宅建築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』香北町埋蔵文化財発掘調査報告書第3集
- (3) 高知県文化財団埋蔵文化財センター，高知県教育委員会 2004『田村遺跡群Ⅱ－高知空港再拡張に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』高知県埋蔵文化財センター報告書第85集
- (4) 野市町教育委員会 1998『下ノ坪遺跡Ⅱ』
- (5) 高知県文化財団埋蔵文化財センター 2002『林田遺跡Ⅰ－緊急地方道整備事業による県道宮ノ口深淵線改良工事に伴う林田遺跡発掘調査報告書』高知県埋蔵文化財センター報告書第71集
高知県文化財団埋蔵文化財センター 2002『林田遺跡Ⅱ－緊急地方道整備事業による県道宮ノ口深淵線改良工事に伴う林田遺跡発掘調査報告書』高知県埋蔵文化財センター報告書第76集
高知県文化財団埋蔵文化財センター 2005『林田遺跡Ⅲ－県道宮ノ口深淵線緊急地方道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』高知県埋蔵文化財センター報告書第92集
- (6) (4)に同じ
- (7) 野市町教育委員会 1989『曾我遺跡発掘調査報告書』
- (8) 野市町教育委員会 1989『深淵遺跡発掘調査報告書』
- (9) (3)に同じ
- (10) 土佐山田町教育委員会 2003『旧予岳寺跡 予岳遺跡ツエガ谷地区－山田北部県営圃場整備事業に伴う発掘調査報告書－』
- (11) 南国市教育委員会 1996『岩村地区県営圃場に伴う岩村遺跡群発掘調査概要』
- (12) 土佐山田町教育委員会 2002『屋舗田丸遺跡－新改中部地区圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』土佐山田町埋蔵文化財報告書第33集

参考文献

- 土佐山田町教育委員会 1979『土佐山田町史』
土佐山田町教育委員会 2000『加茂ハイタノクボ遺跡－県道宮ノ口～深淵線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』

第三章 調査の成果

1. 試掘調査

試掘調査は平成16・17年度に行った。平成16年度にはハイタノクボ地区、鳴滝地区に7箇所、トレンチを設定し、TP1・TP2～TP8と呼称した。平成17年度にはシカソノ地区に1箇所のトレンチを設定し、TR-1と呼称した。

(1) 平成16年度

ここでは、ハイタノクボ地区と鳴滝地区に設定した8箇所の試掘坑のうち、後世の攪乱が著しかったTP2を除く7箇所について詳細を記述して報告とします。尚、TP3からTP8については、県道工事に隣接する部分であり、工事区域に直接関わりはありませんでしたが、地権者のご好意により調査を行うことができました。ここで紙面を借りて厚く感謝いたします。

i 各トレンチの概要(図6～8)

TP1

ハイタノクボ地区に設定した調査坑であり、平成12年度に実施された調査区の北側で、下段に位置する。現耕作土下には土地の造成に伴う盛土(礫混じりの黄灰色土)が見られる。3層は段丘構成礫層と考えられ、4層は泥岩の崩壊による粘土を含んでいる。

TP1からの出土遺物は、近世または近代の遺物である。陶器の鉢底部1点、磁器の広東碗底部1点、と他に土師器細片である。

TP3

平成12年の調査区下段に位置する。現況は東側の斜面を下る小さな水路と小道(農道)に沿う耕作面の北側端部である。耕作土の下には黄色土や10cm大の円礫を含んだ非耕作土層が存在する。この下に旧耕作面と考えられる暗灰色土層が存在した。4層は段丘構成礫層か。5層は泥岩の風化粘土であろう。

TP3からの出土遺物は、2層から土師器、瓦質土器、白磁、陶器や瓦の破片が出土している。また、3層から土師器、弥生土器、須恵器、白磁や瓦の破片が出土している。

出土遺物の中で図示できたのは1から14である。1は古墳時代初頭の小型器台と考えられる。2は土師器の杯で底部には高台が付く。3は土師器の杯底部、4は土師器の皿底部である。5は土師質の鍋口縁部、6は土師器の皿であり、灯明皿であろう。7は精緻な胎土を持つ土師器の杯、8は土師器の皿である。9は土師器の杯底部である。破片であったことから推定法量には疑問が残る。10は須恵器の甕胴部破片である。内面にはナデが施されているが同心円紋が一部で残る。11・12は白磁の碗である。11は口縁部が外側に肥厚する。白磁Ⅱ類である。12の口縁は大きな玉縁を成す。白磁Ⅳ-1類である。13・14は瓦である。13は凹面にナデが施されており、凸面は縄蓆痕が残る。14の凹面には布目圧痕が残る。何れも色調は灰白色系であり、平瓦と考えられる。

TP4

TP3から南へ約5m隔てて設定した調査坑であり、現況は耕作面である。現耕作土下には30cmの層厚で陶磁器を含む灰色土が見られる。恐らく、TP3の2層に対応するものと考えられる。3層は灰褐

1. 試掘調査

色土で構成されるがやや礫の含有が多く、旧耕作土としたTP3とは性格が異なる。4層は段丘構成層と考えられる。

TP4からの出土遺物は、2及び3層から土師器、須恵器、瓦質土器、備前焼、磁器(染付)、陶器(呉器手の碗)や瓦が出土している。

出土遺物の中で図示できたのは15から17である。15は須恵器の壺口縁部である。16と17は瓦である。16の凸面には縄蓆痕が明らかであり、17の凹面には布目圧痕、凸面には縄蓆痕が残る。

TP5

TP4と同じく耕作面に設けられた調査坑である。現耕作土下には礫や灰色土を含んだ黄色土層が存在しており、ここには遺物が含まれる。TP4の3層に対応するであろう。遺物を包含したやや粘性を持つ暗灰色土であり、旧耕作土とは考え難い。

TP5からは2層と3層からそれぞれ土師器や瓦が出土しており、この他に1層から砥石の破片がある。

出土遺物の中で図示できたのは18から21である。18と19はやや形態の異なる土師器の杯口縁部であり、20は土師器の杯底部である。21は平瓦であり、凸面には縄蓆痕が残される。

TP6

現耕作土下には円礫を含んだ黄灰色土層(2層)が遺物を含んで存在する。地表下約50cmには旧表土と考えられる茶褐色土が存在しており、この直下にある灰色粘土層には直径40cm程の遺構状の落ち込みを確認している。尚、この落ち込みの埋土は4層と灰色粘土(5層構成土)である。

TP6から出土した遺物は、2層から土師器、陶器(自然釉が付着)、磁器、瓦であり、4層から土師器、須恵器(壺底部)、陶器である。

出土遺物の中で図示したのは2層から出土した23の磁器小碗口縁部であり、肥前系である。

TP7

耕作面の南寄りに設定した調査坑である。旧表土下には試掘を行った耕作面に定常的に存在する黄灰色土層が存在しており、遺物を伴っている。表土下約60cmでは段丘構成層である灰色砂礫層が検出された。

TP7から出土した遺物は2層から土師器、備前焼、瓦である。

出土遺物の中で図示したのは24と25であり、土師器の杯底部である。

TP8

耕作面の南端に設定した調査坑である。耕作土下に検出した2層は上位が約10cmの層厚を有し黄灰色を呈する。下位は暗灰色である。表土下45cmでは旧耕作土と考えられる灰色土層が在り、直下に帯状に発達した黄灰褐色土を確認した。耕作に伴うものであろう。TP8では地表下約90cmで段丘構成礫層と考えられる灰色砂礫層が見られた。

TP8から出土した遺物は2層から土師器、備前であり、5層から土師器、瓦器、土師質土器、須恵器、青磁、陶器である。

出土遺物の中で図示したのは26から29である。26は青磁の碗口縁である。龍泉窯系統Ⅰ-4類で内面には片彫りによる区画の沈線が2条見られる。27は須恵器の甕胴部破片である。内面は丁寧にナデが加えられる。28は土師質の火器類であろう。焜炉か。29は須恵器と甕胴体で内面に同心円紋

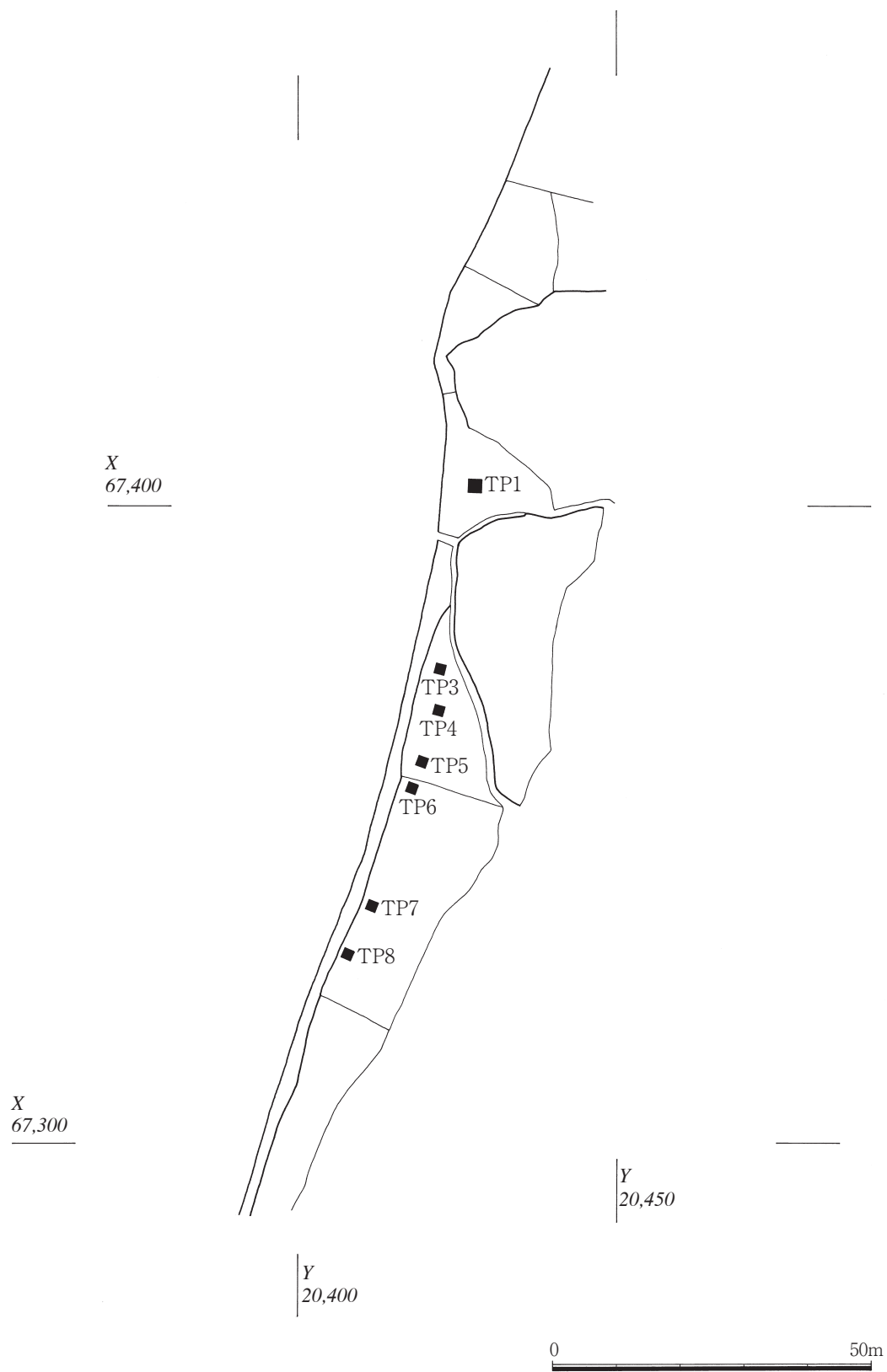
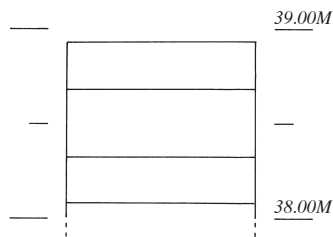


図6 平成16年度 試掘坑位置図(S = 1/1,000)

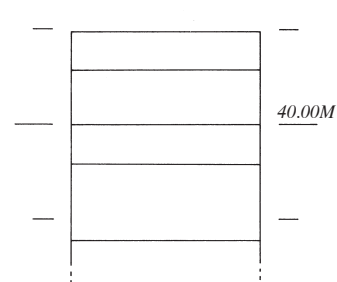
1. 試掘調査



TP1

TP1 層序

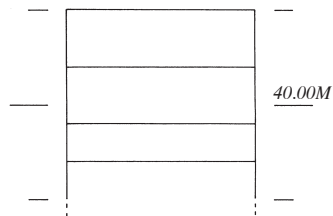
No.	層名	備考
1	灰色土層	耕作土、瓦
2	黄灰色土層	礫混、盛土
3	灰色土層	黄色礫混、土師器、炭化物
4	黄色礫層	



TP3

TP3 層序

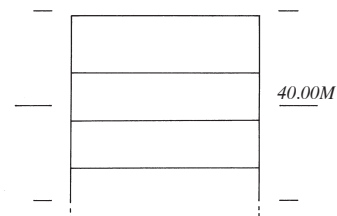
No.	層名	備考
1	灰色土層	耕作土
2	灰色土層	10cm大の円礫混、黄色土
3	暗灰色土層	旧耕作土、粘性あり
4	暗灰色土層	黄色土、30cm大円礫混、風化礫が混じる。
5	黄灰色粘土層	



TP4

TP4 層序

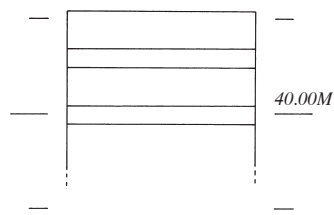
No.	層名	備考
1	灰色土層	耕作土
2	灰色土層	円礫混、黄色土混
3	灰褐色土層	砂質、礫を多く含む。
4	灰色土層	粘性大、円礫を多く含む。



TP5

TP5 層序

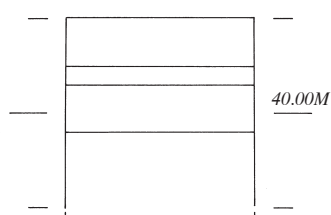
No.	層名	備考
1	灰色土層	耕作土
2	黄色土層	灰色土と礫混
3	暗灰色土層	粘性ややあり
4	灰色粘土層	



TP6

TP6 層序

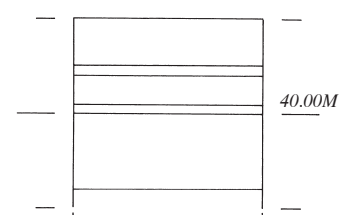
No.	層名	備考
1	灰色土層	耕作土
2	黄灰色土層	5～10cm大の円礫を含む。
3	灰色土層	円礫を多く含む。
4	茶褐色土層	砂を含む。
5	灰色粘土層	30cm大の円礫を含む。



TP7

TP7 層序

No.	層名	備考
1	灰色土層	耕作土
2	黄灰色土層	5～10cm大の円礫を含む。
3	灰色土層	10cm大の円礫を含む。
4	灰色砂礫層	30～40cm大の円礫を多く含む。



TP8

TP8 層序

No.	層名	備考
1	灰色土層	耕作土
2	黄灰色土層	床土？5～10cm大の円礫を含む。
3	暗灰色土層	締まりなし、盛土？5～10cm大の円礫を含む。
4	灰色土層	帯状を成す。
5	灰褐色土層	稀に円礫を含む。
6	灰色砂礫層	20～30cm大を超える円礫を含む。



図7 試掘坑柱状図(S=1/40)

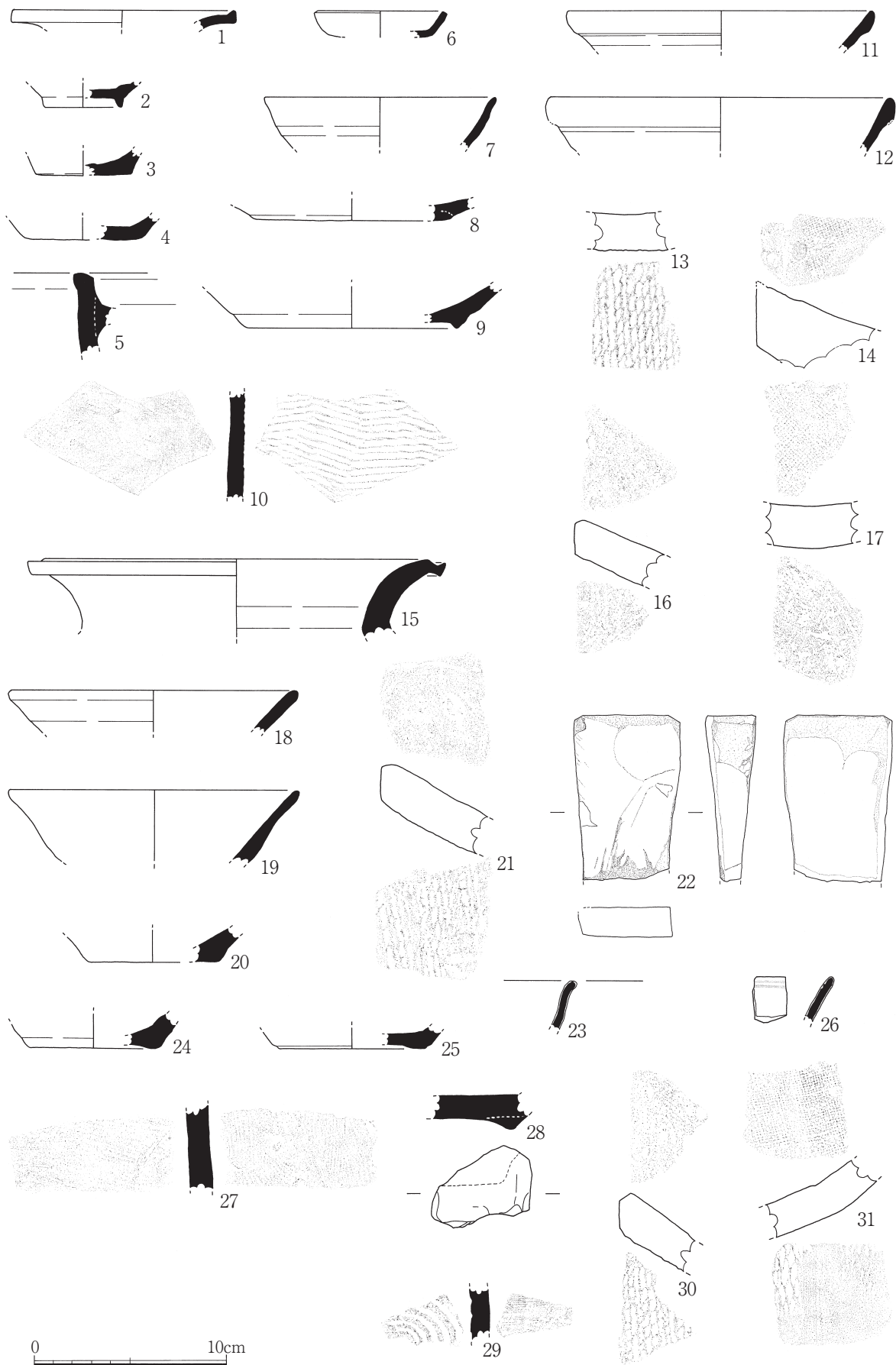


図8 平成16年度試掘坑出土遺物

1. 試掘調査

が残されている。

ii 調査成果

試掘調査の結果は上述のとおりである。以下では各TP（テストピット）から得られた情報を踏まえて試掘のまとめとしたい。今回の調査地点は加茂ハイタノクボ遺跡として包括される部分の西端に位置している。ここには地形的に林田遺跡や日吉神社遺跡などの遺跡域に見られる明瞭な段丘面や段丘崖は残されていない。東から西方向へ下る斜面の傾斜はやや急で、現況ではそこに設けられる耕作面を平坦に保つ為に土地の境に設けられる畦の代わりに高い段が存在している。各々平らな耕作面の西側には崖にも似た高い石垣の様な石積みが設けられている。下段には遠く野市面へと導水されている水路も残されており、近世には今とそれ程変わらない風景が造出されていたであろう。また、調査地点の西側に広がる平坦面は現在の河道を画しているが、嘗ては物部川の旧河道や氾濫原であった。現在では県道や圃場に手が加えられ古の様子を思い浮かべるのも困難である。

今回の出土遺物の中で最も古いものは弥生後期末の土器破片であるから、元々人為的な改変を含んだ土地の利用は可成りの密度で進んでいた地域との印象が強い。TP1では現耕作土下の比較的浅い地点で岩盤風化土が存在し、以南のTP3からTP8で見られたような古代や中世を出自とする遺物が見当たらないことから、この箇所が既に耕作等による削平や土地の改変が顕著であったことを物語る。TP3からTP8は一枚の南北方向に長い同じ耕作面に設定した調査坑である。この辺りは表層に明瞭な河岸段丘が残されていない。しかし、各TPの表土（耕作土）下には概ね段丘を構成したと考えられる砂礫が旧表土や旧耕作土と思われる灰色土と混じりながら層を形成している。その状態は締まりが弱く、耕作面の造る為に上位から持ち込まれた土（整地層）の可能性が高い。調査坑のうちTP3とTP8では旧耕作面（表土）と考えられる3層と4層が確認されているが、不連続である。出土遺物の多くは整地に関わる可能性が高い砂礫層からである。このうち、白磁の11と12は口縁が玉縁になる碗のⅡ類とⅣ-1類と考えられる。また、青磁の26は口縁部の内面に劃花紋が施される龍泉窯系碗Ⅰ-4類。須恵器の15は広口壺の口縁であり8世紀後半と考えられる。また、遺物の中には破片であるが多い瓦が含まれている。厚さは様々であるが須恵質で灰白色から灰色を呈する。凹面には布目、凸面には縄席の痕を残すことでは共通しており、ある程度時期と場所が限定されるものであろう。

平成11年に報告された『加茂ハイタノクボ遺跡』では、川端清司氏が善通寺、中村廃寺などとの同範瓦の存在から、奈良時代の中期から後期にかけてこの地に範型がもたらされた。その要因として寺院の建立を挙げている。上述の出土遺物や中世後期に於ける林田遺跡や林田城跡などの存在を含めて考えると、これらの背景には物部川を介した人や物の流れがあり、この地域が一つの窓口であったことが想像できる。古代から中世前期に掛けて発達してきた流通環境は自然発生的に発達したものであり、人々の欲求に負うところが大きい。東アジアを見た時、それは文明先進国の中国を中心として成立したものである。本調査の成果も東辺に位置するこの島が既にこの環境の中に存在していたことを示すものであろう。

参考文献

『加茂ハイタノクボ遺跡』土佐山田町教育委員会 2000年

(2) 平成17年度

i 各トレンチの概要

シカソノ地区の1箇所にトレンチを設定した。

TR-1

第Ⅰ～Ⅷ層は砂礫層で、西に向かって傾斜する。上層は耕作土となっており、著しく削平、攪乱を受けているものとみられた。第Ⅸ層は自然堆積層である。

基本層序(図9)

第Ⅰ層 褐灰色(10YR4/1)礫質粗粒砂層で、中礫～大礫を含む。

第Ⅱ層 褐灰色(7.5YR4/1)粗粒砂質礫層で、中礫を多く含む。

第Ⅲ層 灰黄褐色(10YR5/2)極粗粒砂層

第Ⅳ層 褐灰色(10YR4/1)中粒砂層で、若干の粘性あり。

第Ⅴ層 にぶい黄色(2.5Y6/3)粗粒砂層

第Ⅵ層 褐灰色(10YR5/1)粗粒砂層で、中礫を多く含む。

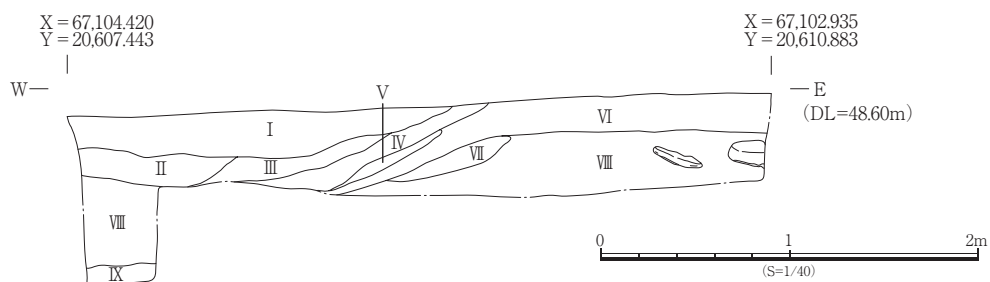
第Ⅶ層 灰黄色(2.5Y6/2)礫質粗粒砂層で、中礫を非常に多く含む。

第Ⅷ層 にぶい黄色(2.5Y6/4)礫質極粗粒砂層で、中礫～大礫を含む。

第Ⅸ層 暗灰黄色(2.5Y5/2)極粗粒砂質礫層で、中礫～大礫を含む。

ii 調査成果

現況は段々畑となっており、上層は著しく削平と攪乱を受けていた。地山は西に向かって大きく傾斜しており、耕作土の直下で地山が確認された箇所もみられた。遺物は弥生土器の細片が1点のみ出土したが、流れ込みによるものとみられ、遺物包含層、遺構共に確認されず、試掘調査を行った地点については本調査は必要ないものと判断された。



層位

第Ⅰ層 褐灰色(10YR4/1)礫質粗粒砂層で、中礫～大礫を含む。
 第Ⅱ層 褐灰色(7.5YR4/1)粗粒砂質礫層で、中礫を多く含む。
 第Ⅲ層 灰黄褐色(10YR5/2)極粗粒砂層
 第Ⅳ層 褐灰色(10YR4/1)中粒砂層で、若干の粘性あり。
 第Ⅴ層 にぶい黄色(2.5Y6/3)粗粒砂層

第Ⅵ層 褐灰色(10YR5/1)粗粒砂層で、中礫を多く含む。
 第Ⅶ層 灰黄色(2.5Y6/2)礫質粗粒砂層で、中礫を非常に多く含む。
 第Ⅷ層 にぶい黄色(2.5Y6/4)礫質極粗粒砂層で、中礫～大礫を含む。
 第Ⅸ層 暗灰黄色(2.5Y5/2)極粗粒砂質礫層で、中礫～大礫を含む。

図9 シカソノ地区 TR-1 北壁セクション図

2. 本調査

2. 本調査

本調査は平成16年度の試掘調査で遺物が出土した鳴滝地区の一部について行った。調査では近世のピットを検出したほか、近世の整地層より弥生時代と古代から近世にかけての遺物が出土した。

(1) 基本層序(図10)

現況は段々畑となっており、上層は著しく削平を受けたものとみられた。また、土層は西に向かって大きく傾斜し、また、非常に起伏していた。

第Ⅰ層は耕作土で、一部では削平を受けたものとみられ、確認されなかった。

第Ⅱ層は旧耕作土で、一部では削平を受けていた。

第Ⅲ・Ⅳ層は調査区南部を除く部分で確認された土層である。

第Ⅴ層は調査区南部でのみ確認された土層で、ほぼ推定に堆積する。下面で近世のピットを検出した。

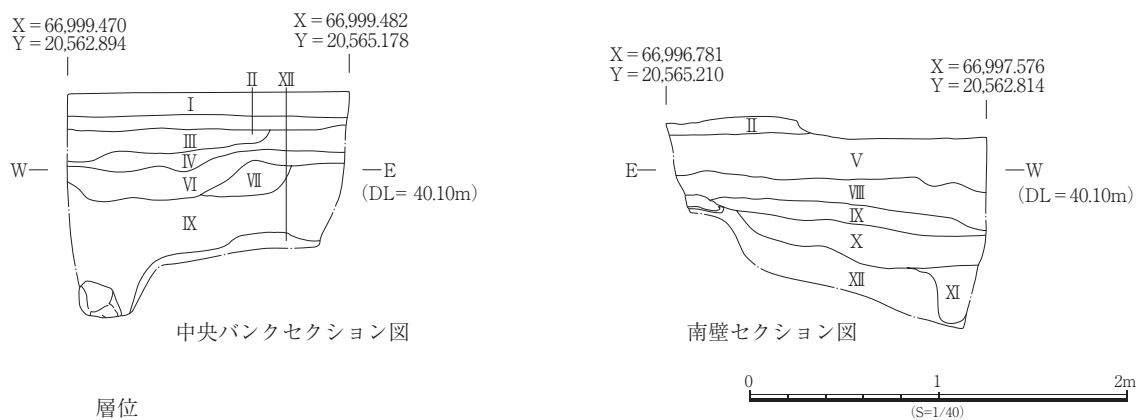
第Ⅵ層は調査区中央部で確認された土層で、西に向かって傾斜する。

第Ⅶ層は調査区中央部の一部のみで確認された土層である。

第Ⅷ～Ⅹ層は調査区南部でのみ確認された土層で、西に向かって傾斜する。第Ⅹ層は調査区南部の極一部でのみみられた土層で、古代から近世にかけての遺物が出土した。

第Ⅺ層は調査区のほぼ全域で確認された土層で、堆積が厚く、弥生時代と古代から近世にかけての遺物を多く含み、近世の整地層である。

第Ⅻ層は自然堆積層で、西に向かって大きく傾斜する。



層位

- | | |
|-----|---|
| 第Ⅰ層 | 褐灰色(10YR5/1)砂質シルト層 |
| 第Ⅱ層 | 灰黄色(2.5Y6/2)極細粒砂質シルト層で、下部にマンガンが沈着する。 |
| 第Ⅲ層 | 黄灰色(2.5Y6/1)細粒砂質シルト層で、小礫を含む。 |
| 第Ⅳ層 | 褐灰色(10YR6/1)極細粒砂質シルト層で、大礫を含む。 |
| 第Ⅴ層 | 浅黄色(2.5Y7/4)砂質シルト層で、中礫を含む。 |
| 第Ⅵ層 | 褐灰色(10YR5/1)極細粒砂質シルト層で、大礫と第Ⅶ層のブロックを含む。 |
| 第Ⅶ層 | 明黄褐色(2.5Y6/1)粘土層で、大礫を含む。 |
| 第Ⅷ層 | 褐灰色(10YR6/1)砂質シルト層で、炭化物と中礫、土器を含む。 |
| 第Ⅸ層 | にぶい黄橙色(10YR6/3)砂質シルト層で、中礫を含む。 |
| 第Ⅹ層 | 灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルト層で、黄色の小礫と土器、少量の大礫を含む。(近世の整地層) |
| 第Ⅺ層 | 黄灰色(2.5Y5/1)砂質シルト層で、大礫～巨礫を非常に多く含む。(近世の整地層) |
| 第Ⅻ層 | 明黄褐色(10YR7/6)極細粒砂質シルト層で、マンガンを含む。(自然堆積層) |

図10 セクション図

(2) 堆積層出土遺物

第Ⅰ・Ⅱ層には遺物が少なく、第Ⅰ層から近世磁器片1点、第Ⅱ層から古代の平瓦片1点が出土した。第Ⅲ・Ⅳ層からは古代の須恵器片と土師質土器片、近世陶磁器片、平瓦片が出土した。第Ⅵ・Ⅶ層から出土した遺物は少量であるが、土師質土器片、白磁片、近世陶磁器片、瓦片がみられた。第Ⅰ～Ⅶ層から出土した遺物は細片であり、図示できなかった。第Ⅹ層は比較的多くの遺物がみられ、弥生土器片、須恵器、土師質土器、瓦など弥生時代と古代の遺物が出土し、以下の遺物が図示できた。第Ⅺ層は地山の直上に堆積する土層で、今回の調査で最も遺物が多く出土した。第Ⅺ層からは弥生土器片、須恵器、土師質土器、近世陶磁器、瓦など弥生時代と古代、近世の遺物が出土し、以下の遺物が図示できた。

第Ⅹ層出土遺物

須恵器(図11-32~34)

32は杯で、底部の約1/6が残存し、底径10.3cmを測る。底部には若干「ハ」の字に開く高台を貼付する。器面には回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土はやや密で礫を含み、焼成は良く、色調は内面が灰白色、外面が灰色を呈する。33・34は平高台の椀である。33は

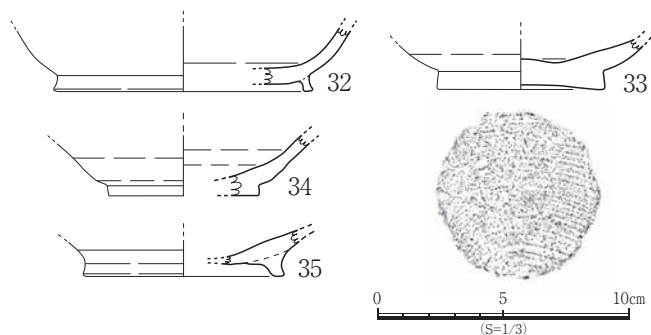


図11 第Ⅹ層出土遺物実測図(須恵器・土師質土器)

底部が完存し、底径6.4cmを測る。器面は著しく摩耗するため調整は不明である。底部の切り離しは静止糸切りである。胎土は密で礫を含み、焼成はやや悪く、色調は内面が灰黄色、外面が浅黄色を呈する。34は底部の約1/5が残存し、底径5.9cmを測る。器面には回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転糸切りである。胎土はやや密で砂粒を含み、焼成は良く、色調は内外面とも明オリーブ灰色を呈する。

土師質土器(図11-35)

35は輪高台の椀で、底部の約1/3が残存し、底径7.7cmを測る。器面は著しく摩耗するため調整は不明で、底部には「ハ」の字に開く高台を貼付する。胎土はやや密で砂粒を多く含み、焼成は良く、色調は内外面とも橙色を呈する。

第Ⅺ層出土遺物

須恵器(図12-36)

36は杯蓋で、口縁部の約1/5が残存し、口径11.0cmを測る。天井部はほぼ平らで、口縁部は若干内湾し、端部を下方へ細く仕上げる。器面には回転ナデ調整を施すが、外面は摩耗するため不明瞭である。外面にはわずかに自然釉が付着する。胎土は密で、焼成は良く、色調は内外面とも黒褐色を呈する。

土師質土器(図11-37~42)

37~39は杯である。37は底部の約1/4が残存し、底径6.4cmを測る。器壁は薄く、体部は比較的上方に立ち上がる。器面は著しく摩耗するため調整は不明で、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土は密で、焼成はやや良く、色調は内外面ともいぼいぼ橙色を呈する。38は底部の約1/5が残存し、底径6.0cmを測る。体部は外上方に緩やかに立ち上がる。器面は著しく摩耗するため調整と底部の切

2. 本調査

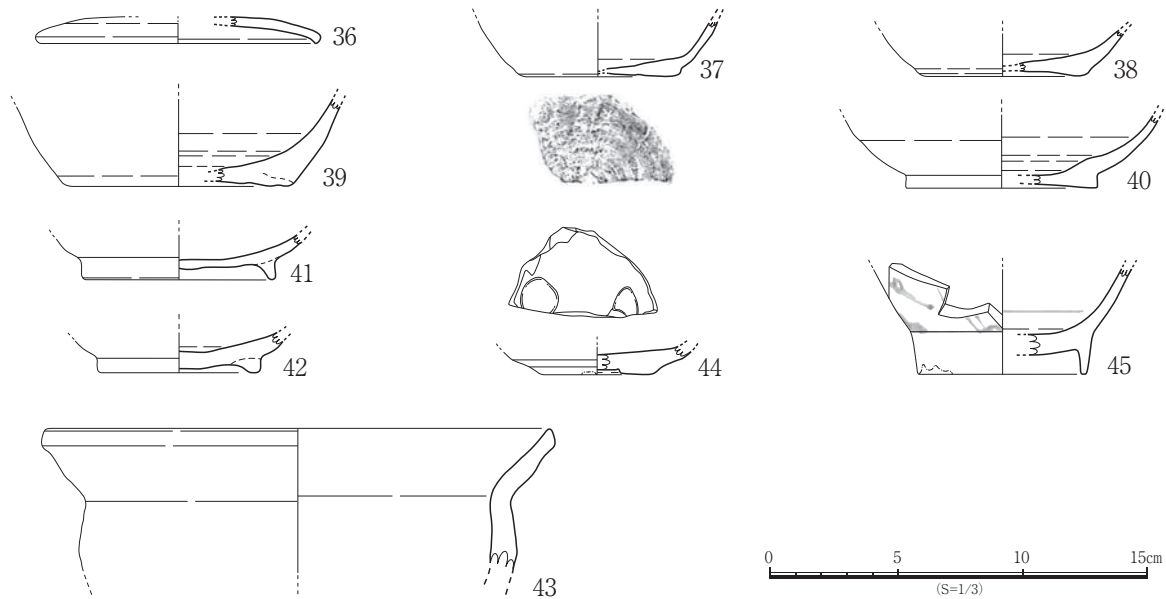


図 12 第Ⅺ層出土遺物実測図（須恵器・土師質土器・土師器・陶器・磁器）

り離しは不明である。胎土は密で、焼成はやや良く、色調は内外面とも橙色を呈する。39は底部の約1/4が残存し、底径8.4cmを測る。器壁が厚く、体部はやや内湾して立ち上がる。器面は著しく摩耗するため調整と底部の切り離しは不明である。胎土はやや密で砂粒を含み、焼成はやや良く、色調は内外面とも浅黄橙色を呈する。

40～42は椀である。40は平高台の椀で、底部の約1/6が残存し、底径7.6cmを測る。器壁が薄く、内底面が落ち込み、体部は内湾して立ち上がる。器面は著しく摩耗するため調整と底部の切り離しは不明である。胎土は密で砂粒を含み、焼成は良く、色調は内外面とも橙色を呈する。41は輪高台の椀で、底部の約1/2が残存し、底径7.5cmを測る。器壁が薄く、底部は平らで、「ハ」の字に開く細い高台を貼付する。器面は著しく摩耗するため調整は不明である。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内外面とも橙色を呈する。42は輪高台の椀で、底部の約1/2が残存し、底径6.2cmを測る。器壁が厚く、底部には断面逆台形を呈する低い高台を貼付する。器面は著しく摩耗するため調整は不明である。胎土は密で、焼成は良く、色調は内面がにぶい黄橙色、外面が橙色を呈する。

土師器 (Fig. -43)

43は甕で、口縁部の一部が残存し、口径20.0cmを測る。口縁部は頸部より屈曲して外上方にまっすぐ伸び、端部は上方へつまみあげる。器面は著しく摩耗するため調整は不明である。胎土はやや密で礫を含み、焼成はやや良く、色調は内外面とも黄橙色を呈する。

陶器 (図11-44)

44は唐津焼の皿で、底部の約1/2が残存し、底径4.4cmを測る。底部には幅が広く低い削り出し高台を有する。外面の一部と内面には灰釉を施し、見込には2箇所砂目痕が残る。胎土は密で、焼成は良く、色調は生地が灰白色、釉調は灰オリーブ色を呈する。

磁器 (図11-45)

45は広東碗で、底部の約1/2が残存し、底径6.6cmを測る。底部には細く直立する高台を有し、体部

は緩やかに内湾して立ち上がる。器面には透明釉を薄く施し、畳付を釉ハギする。体部外面には草花文と見られる染付、内面には圈線、見込には一部に染付がみられる。

瓦(図12-46・47)

46は平瓦で、一部が残存する。凹面には一部に布目痕と模骨痕が残り、端部は面取りを行い、凸面には縄目状のタタキの目が残る。胎土はやや密で礫と砂粒を多く含み、焼成はやや良く、色調は浅黄色を呈する。

47は玉縁式の丸瓦で、一部が残存する。凹面には布目痕が残り、凸面はナデ調整とみられるが、摩耗するため調整は不明瞭である。胎土は密で、焼成はやや良く、色調は灰白色を呈する。

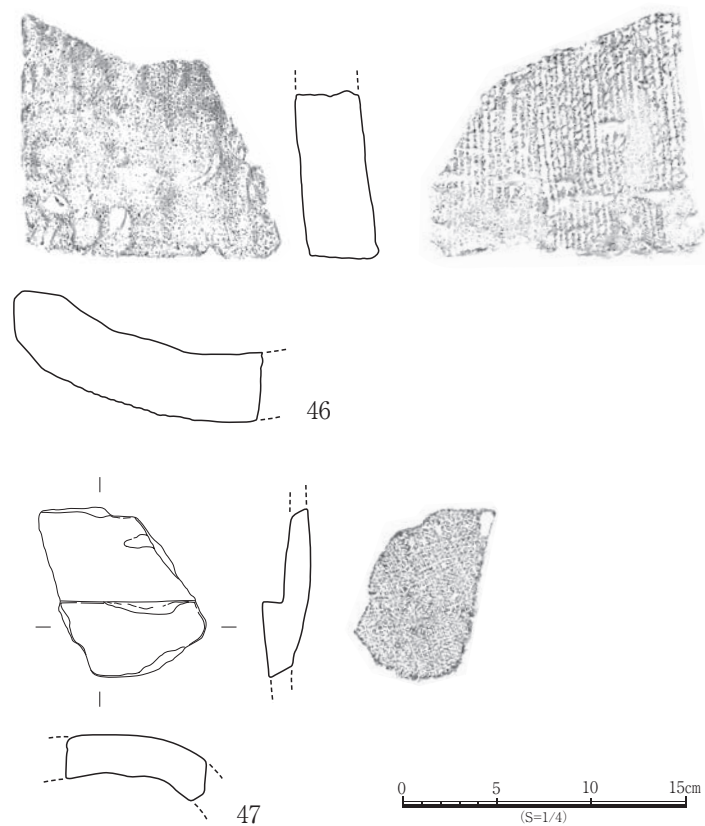


図13 第Ⅺ層出土遺物実測図(瓦)

(3) 遺構と遺物

第Ⅵ層の下でピット2個を検出した。P-2からは近世の遺物が出土している。

P-1

調査区の東端で検出した楕円形を呈するピットで、長径1.27m、短径0.90m、深さ12cmを測る。断面は舟底形を呈し、埋土は灰黄褐色砂質シルトで、中粒砂と中～大礫、明黄褐色シルトのブロックを含んでいた。出土遺物には弥生土器片1点、土師質土器片3点がみられたが、図示できなかった。

P-2

調査区の南端で検出した不正円形を呈するピットで、径0.58m、深さ5cmを測る。断面は舟底形を呈し、埋土は灰黄褐色砂質シルトで、細粒砂と中礫を含んでいた。出土遺物には近世磁器片1点がみられたが、図示できなかった。

(4) まとめ

今回の調査地は現在は段々畑として利用されて

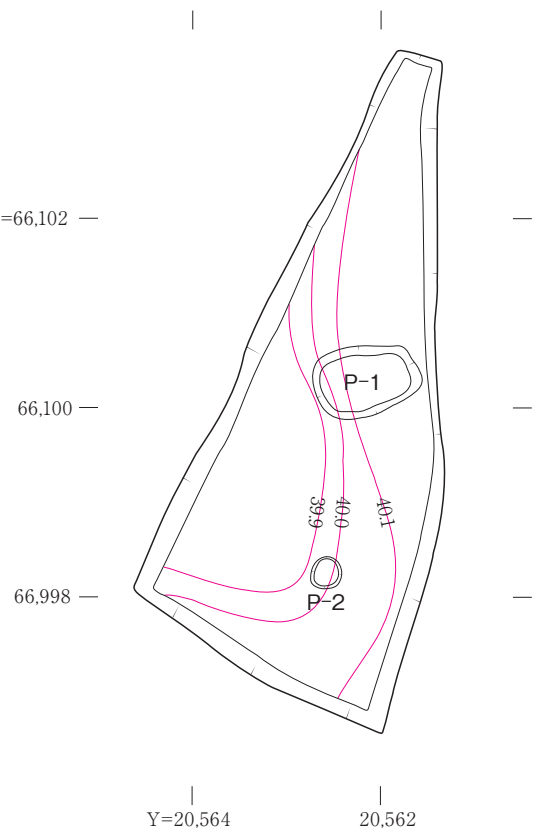


図14 第Ⅴ層遺構平面図

2. 本調査

いたが、地山は急傾斜で非常に起伏に富んでおり、段丘の斜面部にあたることが確認された。地山の直上に堆積する土層からは近世の遺物が出土しており、近世後期頃に整地されたものと考えられる。今回の調査で確認された遺構は近世のピット2個のみであり、古代の遺構は確認されなかった。堆積層より出土した遺物は弥生土器、須恵器、土師質土器、近世陶磁器、古代の瓦などで、すべて近世の整地層からの出土であった。しかし、12m²という狭い範囲でありながら遺物量は比較的多く、本調査区の東側の段丘上部には遺構が存在する可能性が非常に高くなった。

出土した遺物には古代の瓦が多く含まれており、平瓦と丸瓦がみられた。また、表採資料やこれまでの調査では軒瓦が確認されており、軒丸瓦は複弁八葉蓮華文で、外区には線鋸歯文を有し、県内では加茂ハイタノクボ遺跡以外には類例をみないものである。四国内では善通寺などの香川県西部の古代寺院で出土しているものと同範であり、奈良時代の遺物であるとされている。加茂ハイタノクボ遺跡は奈良時代の窯業関連遺跡とされ、今回の調査ではこの時期の須恵器が少量であるが出土している。

その他の遺物では弥生時代後期の土器片が少量であるがみられた。また、これまで確認されていなかった10世紀末頃の遺物が多く見られ、この時期に集落等が存在したものとみられる。また、隣接地には現在は消滅しているが平安時代の窯跡とされる山本前田窯跡や、平安時代の遺構や瓦などの遺物が出土し、窯業関連遺跡とされている日吉神社遺跡があり、これらの遺跡との関連も非常に興味深い。今回の調査は段丘の斜面部に当り、古代の遺構を確認することはできなかったが、おそらく段丘上部の日吉神社遺跡を中心に平安時代の遺構が存在し、周辺には窯跡もあるものとみられ、今後さらに周辺の調査が行われれば一連の遺跡となることも考えられよう。

当遺跡では未だ窯跡は確認されておらず、窯跡の明確な時期については不明であるが、遺物包含層などから出土した遺物を見る限り、奈良時代から平安時代にかけて窯跡が築かれた可能性が高い。軒丸瓦については当遺跡の他に県内では類例がないため、どこで使用されたのかは明らかではないが、物部川を見下ろす立地にあることから、物部川を利用して運搬されたものと考えられる。土佐山田町の瓦窯跡としては、比江廃寺で使用された瓦を焼いたとされる植タンガン窯跡や、国分寺跡で使用された瓦を焼いたとされる東谷1号窯跡など国分川流域の須江古窯址群が知られる。加茂ハイタノクボ遺跡が位置する物部川流域には、約2km下流に香南市野市町の亀山窯跡やアゴデン・白岩窯跡など平安時代の瓦が出土する窯跡が位置しており、少なからず関連があるものとみられ、加茂ハイタノクボ遺跡の周辺で焼かれた瓦は、物部川下流域の香南市野市町や南国市辺りに運搬された可能性が高いのではないだろうか。

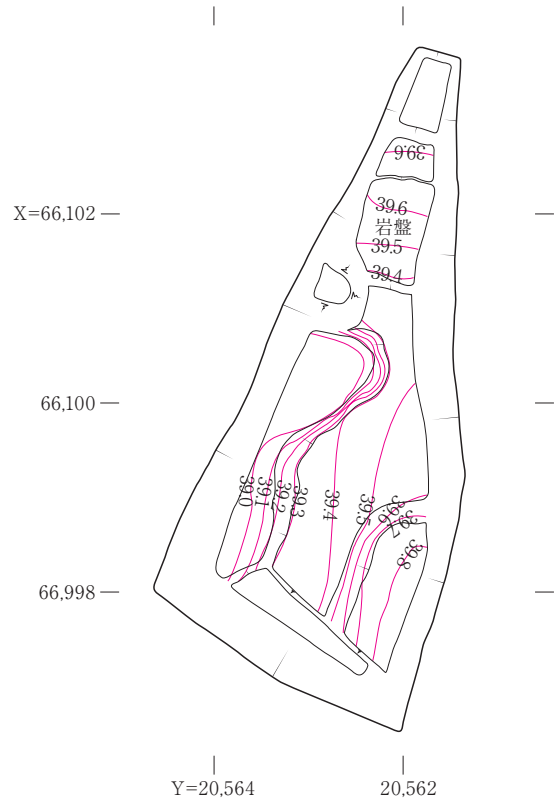


図 15 第Ⅻ層遺構平面図

表2 出土遺物観察表1

図版 No.	出土地点		器種	器形	法量 (cm)				特徴	色調			備考
	TP	層位			口径	器高	胴径	底径		内面 (凹面)	外面 (凸面)	断面	
1	TP3	2層	土師器	器台	11.6	[0.9]	—	—	内面はナデ。口縁は外反し端部で短く立ち上がる。	にぶい黄橙 10YR7/4	浅黄橙 10YR8/4	浅黄 2.5Y7/3	
2	TP3	3層	土師器	椀	—	[1.3]	—	4.1	底部には断面三角形の高台が付く。	橙 5YR7/6	橙 5YR7/6	灰 7.5Y4/1	
3	TP3	3層	土師器	杯	—	[1.3]	—	5.0	内面にロクロ目を残す。平底の端部で稜を成す。胎土中に差砂粒を含む。	灰 5Y6/1	浅黄橙 7.5Y8/6	灰 7.5Y4/1	
4	TP3	3層	土師器	皿	—	[1.2]	—	6.0	内面はナデ。体部は短く外上方に立ち上がる。胎土中に3mm大の砂粒が稀に含まれる。	褐灰 10YR4/1	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	
5	TP3	3層	土師質 土器	鍋	—	[4.2]	—	—	鐏下に押圧痕(指頭)が残る。口縁はやや肥厚し口唇は面を成す。口縁外側に水平な鐏が付く。	明赤褐 5YR5/6	明褐 7.5YR	橙 7.5YR6/6	
6	TP3	2層	土師器	皿	6.4	[1.4]	—	—	内面はナデ。外面に煤が付着する。	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	浅黄橙 7.5YR8/4	
7	TP3	3層	土師器	杯	5.9	[2.6]	—	—	内面はナデ。外面にはロクロ目が残る。口縁は内湾気味に外上方へ立ち上がり、口唇は丸くおさめる。胎土は精緻。	橙 5YR7/6	浅黄橙 7.5Y8/5	黄灰 2.5Y5/1	
8	TP3	3層	土師器	皿	—	[1.2]	—	10.2	内面はナデ。ロクロ目が残る。外面底部に糸切り痕。	灰白 2.5Y8/2	灰白 2.5Y8/3	灰白 2.5Y8/3	
9	TP3	3層	土師器	杯	—	[2.2]	—	[10.8]	内・外面にナデ。底部端に断面三角形の低い高台が貼付される。	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/3	灰 5Y6/1	
10	TP3	3層	須恵器	甕	—	—	全厚 0.9	—	内面はナデで一部に同心円紋が残る。胎土に円・裂孔が存在。	灰 5Y6/1	灰 10Y6/1	灰 10Y6/1	
11	TP3	3層	白磁	碗	15.7	[2.0]	—	—	内面はナデ。外面は匏ナデ。口縁で外側に肥厚する。胎土中に円孔を多く含む。	灰白 5Y7/2	灰白 5Y7/2	灰白 10Y8/1	白磁碗 Ⅱ類
12	TP3	2層	青磁	碗	17.5	[2.8]	—	—	内面はナデ。口縁は外側に肥厚しやや垂下する。胎土中には多くの円孔と稀に裂孔が存在。釉調はやや緑色を帯びる。	灰白 5Y7/1	灰白 5Y7/1	灰白 10Y8/1	白磁碗 Ⅳ-1類
13	TP3	2層	瓦	平瓦	—	—	全厚 1.9	—	凹面はナデ。凸面に縄 蓆痕。	灰白 7.5Y7/1	灰 N6/0	灰 5Y4/1	
14	TP3	3層	瓦	平瓦	—	—	全厚 3.4	—	凹面には布目圧痕。側縁は直線的で滑らか。	灰白 5Y8/1	灰白 5Y8/1	灰白 2.5Y8/1	
15	TP4	2・3層	須恵器	壺	21.6	[4.0]	—	—	内面はナデ。外面には粗な横ナデが施される。口縁は外反し端部で挟れる。口唇は内傾する面を成す。胎土中に円・裂孔を含む。	灰 7.5Y6/1	暗青灰 10BG4/1	灰 7.5Y6/1	
16	TP4	1・2層	瓦	平瓦	—	—	全厚 1.9	—	凹面は摩滅する。凸面には縄蓆痕が残る。側縁は平らな面を成す。胎土中に3~5mm大の角礫を稀に含む。	灰 7.5Y4/1	灰オリーブ 5Y5/2	暗灰 N3/0	
17	TP4	1・2層	瓦	平瓦	—	—	全厚 2.3	—	凹面は布目圧痕。凸面には縄蓆痕が残る。胎土中に3mm大の砂粒が含まれる。	灰白 2.5Y8/2	灰白 5Y8/1	灰白 2.5Y8/2	
18	TP5	2層	土師器	杯	14.6	[2.2]	—	—	内・外面にナデ。口縁は直線的に外上方へ立ち上がる。口唇は太く丸く修める。	浅黄橙 10YR8/3	淡黄 2.5Y8/3	浅黄橙 10YR8/4	
19	TP5	2層	土師器	杯	14.8	[3.7]	—	—	内面はナデ。外面にはロクロ目が残る。口縁は直線的に外上方へ立ち上がり、口唇は太く丸く修める。胎土中に0.5mm以下の砂粒を含む。	にぶい黄橙 10YR7/4	橙 5YR7/6	にぶい橙 5YR6/4	

表3 出土遺物観察表2

図版 No.	出土地点		器種	器形	法量(cm)				特徴	色調			備考
	TP	層位			口径	器高	胴径	底径		内面(凹面)	外面(凸面)	断面	
20	TP5	3層	土師器	坏	—	[1.7]	—	6.6	平底の底部から外販して外上方に立ち上がる。	浅黄橙 7.5YR8/6	浅黄橙 7.5YR8/6	浅黄橙 10YR8/4	
21	TP5	2層	瓦	平瓦	—	—	全厚 2.3	—	凹面に篋状の圧痕が残る。凸面縄席痕。側面は平ら。胎土中には1cm大の角礫が稀に見られ、3～5mm大の小礫も含む。	灰白 2.5Y7/2	灰白 2.5Y8/2	灰 5Y4/1	
22	TP5	1層	砥石	中砥	全長 [8.6]	全幅 [5.5]	全厚 [2.6]	—	扁平な直方体の砥石。使用面は両主面と両側面で、中央部は大きく窪む。約半分を欠損している。砂岩製?	—	—	—	
23	TP6	2層	磁器	小碗	—	[2.6]	—	—	口縁は外反する。口唇は丸く修める。透明釉を施す。胎土中に円孔を残す。肥前系	灰白 10Y8/1	灰白 5Y8/1	灰白 5Y8/1	
24	TP7	2層	土師器	坏	—	[1.8]	—	6.4	底部は浅い凹面を成す。端部は外側に粘土が盛り上がる。	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	浅黄橙 10YR8/3	
25	TP7	2層	土師器	坏	—	[1.1]	—	7.8	底部外面は中央部が凹む。端部に粘土が盛り上がる。胎土中に小粒砂を多く含む。	橙 5YR7/8	橙 7.5YR7/6	灰 5Y5/1	
26	TP8	3層	青磁	碗	—	[2.3]	—	—	口縁に横方向の2条区画沈線。上位の沈線は片彫り状で下側が深く、下位の沈線は断面「V」字。釉には粗な貫入が見られる。	灰オリーブ 5Y6/2	灰オリーブ 5Y6/2	灰白 5Y7/1	龍泉窯碗 I-4類
27	TP8	2層	須恵器	甕	全長 [4.8]	—	全厚 [1.2]	—	内面は篋状工具によるナデ。外面にはナデ、篋状工具痕。	灰 5Y6/1	褐灰 10YR5/1	黄灰 2.5Y6/1	
28	TP8	3層	土師質土器	風炉?	—	[2.1]	—	—	底部は方形を成す? 断面三角形の脚が四隅に貼付される。内・外面にナデ。	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	橙 5YR7/8	
29	TP8	3層	須恵器	甕	全長 [2.6]	—	全厚 [0.95]	—	内面に同心円紋が残る。外面はハケ状の工具根を残し、後にナデ。	灰白 2.5Y8/1	灰白 7.5Y8/1	灰白 2.5Y8/1	
30	—	表採	瓦	平瓦	—	—	全厚 2.0	—	凹面はナデ。凸面に縄席痕。側面は平らな面を成し、上部隅角を面取りする。胎土中に大きな裂孔が残る。	灰白 2.5Y8/2	にぶい黄褐 10YR5/4	淡黄 2.5Y8/3	
31	—	表採	瓦	平瓦	—	—	全厚 1.8	—	凹面は布目圧痕。凸面には縄席痕が残る。凹面には浅い段が残る。胎土中に2mm大の砂粒が多く含まれる。	灰 N5/0	灰 N5/0	灰白 5Y8/1	
32	—	第X層	須恵器	杯	—	[2.5]	—	[10.3]	体部回転ナデ調整。底部外面回転ヘラ切り。	灰白 5Y7/1	灰 5Y5/1	灰白 5Y7/1	高台貼付
33	—	〃	須恵器	碗	—	[2.0]	—	6.4	底部外面静止糸切り。	灰黄 2.5Y6/2	浅黄 5Y7/3	灰白 5Y7/2	平高台
34	—	〃	須恵器	碗	—	[2.4]	—	[5.9]	体部外面回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り。	明オリーブ灰 2.5GY7/1	明オリーブ灰 2.5GY7/1	明オリーブ灰 2.5GY7/1	平高台
35	—	〃	土師質土器	碗	—	[1.8]	—	[7.7]		橙 5YR7/6	橙 7.5YR8/6	黄灰 2.5YR5/1	輪高台 摩耗する
36	—	第XI層	須恵器	蓋	[11.0]	[1.1]	—	—	回転ナデ調整。	黒褐 10YR3/1	黒褐 10YR3/1	黒褐 10YR3/1	自然釉付着
37	—	〃	土師質土器	杯	—	[2.2]	—	[6.4]	底部外面回転ヘラ切り。	橙 7.5YR7/6	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	摩耗する
38	—	〃	〃	〃	—	[1.8]	—	[6.0]		明黄褐 10YR7/4	明黄褐 10YR7/4	明黄褐 10YR7/4	摩耗する
39	—	〃	〃	〃	—	[3.5]	—	[8.4]		浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	浅黄 10YR8/3	摩耗する
40	—	〃	〃	碗	—	[2.9]	—	[7.6]		橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	平高台
41	—	〃	〃	〃	—	[1.7]	—	[7.5]		暗灰黄 2.5Y5/2	橙 7.5YR7/6	褐灰 10YR4/1	輪高台

表 4 出土遺物観察表 3

図版 No.	出土地点		器種	器形	法量 (cm)				特徴	色調			備考
	TP	層位			口径	器高	胴径	底径		内面(凹面)	外面(凸面)	断面	
42	—	第Ⅺ層	土師質土器	碗	—	[1.2]	—	[6.2]		にぶい橙色 10YR7/4	橙色 5YR6/6	橙色 5YR7/6	輪高台
43	—	〃	土師器	甕	[20.0]	[5.7]	[17.4]	—		にぶい橙色 10YR7/4	にぶい橙色 10YR7/4	にぶい橙色 10YR7/3	摩耗する
44	—	〃	陶器	皿	—	[1.1]	—	[4.4]	削り出し高台，灰釉を施す。	生地灰白色 7.5YR6/2	釉調灰オリーブ色 7.5Y6/2	灰白色 7.5Y7/1	唐津焼 砂目痕
45	—	〃	磁器	碗	—	—	[6.6]	—	外面に草花文，内面に圏線の染付，畳付を釉ハギ。	生地灰白色 N8/0	釉調透明	灰白色 N8/0	広東碗
46	—	〃	瓦	平瓦	—	—	全 厚 [3.6]	—	凹面縄目状のタタキ目，端部を面取り，凸面布目痕，模骨痕が残る。	浅黄色 2.5Y8/3	浅黄色 2.5Y8/3	浅黄色 2.5Y8/3	
47	—	〃	〃	丸瓦	—	—	全 厚 [2.3]	—	凹面布目痕が残る。	灰白色 2.5Y8/1	灰白色 2.5Y8/1	灰白色 2.5Y8/1	玉縁式

写真図版



ハイタノクボ地区
試掘調査前遠景(南から)



鳴滝地区
試掘調査前遠景(北西から)



TP - 1
東壁(西から)

PL.2

TP - 3

西壁(南から)



TP - 3

南壁(北から)

TP - 4

北壁(南西から)



TP - 5

北壁(南西から)



TP - 5

南壁(北東から)

TP - 6

北壁(南から)



PL.4



TP - 6
北壁(南東から)



TP - 7
北壁(南西から)



TP - 7
北壁(南から)

TP - 8

北壁(南から)



TP - 8

南壁(北東から)

TP - 7・8

埋め戻し後(南から)



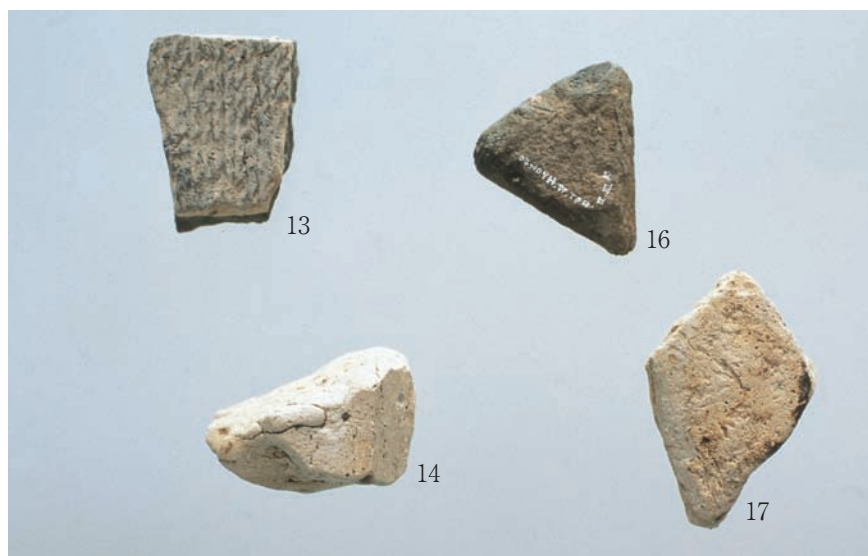


鳴滝地区試掘調査出土遺物1

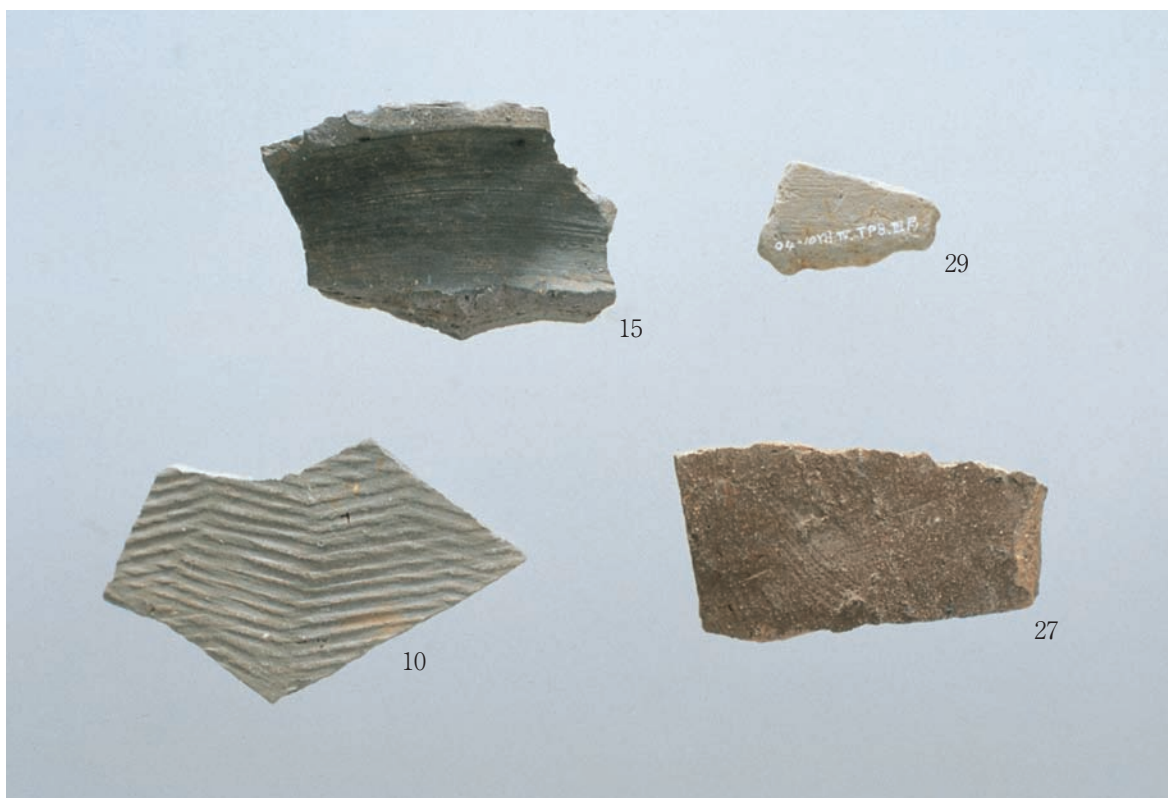
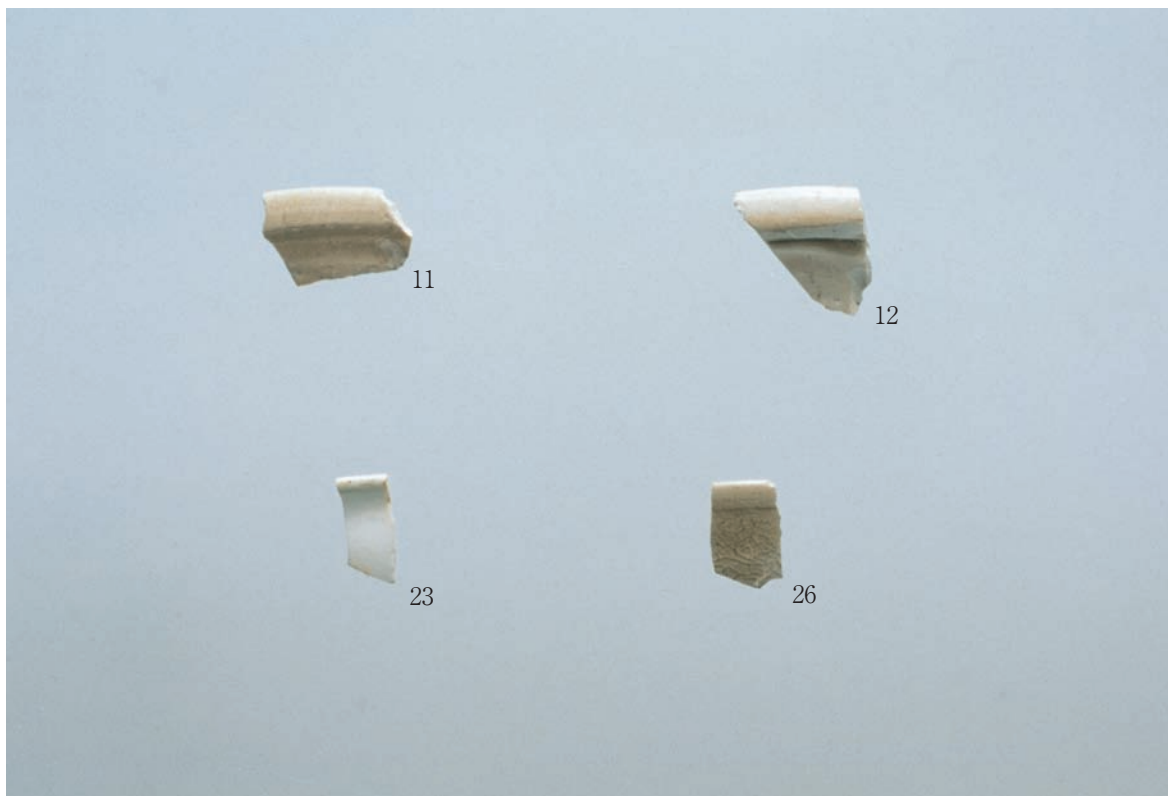


鳴滝地区試掘調査出土遺物2





鳴滝地区試掘調査出土遺物4





本調査遺構完掘状態1(南東より)



本調査遺構完掘状態2(北東より)



本調査南壁セクション(北より)



本調査中央バンクセクション(南より)



シカソノ地区TR-1設定状態(南より)



シカソノ地区TR-1完掘状態(南より)



本調査調査前風景(南より)



本調査P-1検出状態(北東より)



本調査P-1半裁状態(東より)



本調査P-2検出状態(西より)



本調査P-2完掘状態(北より)



東壁セクション(北西より)



須恵器(杯), 近世陶器(皿), 近世磁器(碗), 瓦(平瓦・丸瓦)



須恵器(杯),土師質土器(杯・碗・甕)

報告書抄録

ふりがな		かもはいたのくぼいせきに						
書名		加茂ハイタノクボ遺跡Ⅱ						
副書名		県道宮ノ口深淵線緊急地方道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次								
シリーズ名		高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書						
シリーズ番号		第98集						
編著者名		藤方正治・徳平涼子						
編集機関		(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター						
所在地		〒783-0006 高知県南国市篠原南泉1437-1 TEL 088-864-0671						
発行年月日		2007年3月22日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かもはいた 加茂ハイタ のくぼいせき ノクボ遺跡	〒782-0012 こうちけん 高知県 かみし 香美市 とさやまだちよう 土佐山田町 かも 加茂	39323	190204	33° 35' 45"	133° 43' 21"	2004.10.18) 2004.10.27 2005.10.17) 2005.10.24	70㎡	県道宮ノ口 深淵線緊急 地方道路整 備事業
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物	特記事項	
加茂ハイタ ノクボ遺跡	窯業関連遺跡	古代				弥生土器 土師器 須恵器 土師質土器 平瓦 丸瓦	近世の整地層より 10世紀末頃の遺物が まとまって出土した。	
	集落	近世	ピット 2個			近世陶器 近世磁器	斜面上位に遺跡の 中心があるものと考えられる。	
要約	調査区は山陵から下った斜面末端に位置し、土佐山田町教育委員会による『加茂ハイタノクボ遺跡』の調査区に隣接している。道路整備事業に伴う調査であり、調査区は狭小であった。調査の結果、遺構としては近世出自と考えられるピットが2個発見された。また、遺物としては弥生後期末から近代にかけてのものが発見されており、古代から中世前期の遺物がやや豊富である。中でも瓦は破片であるが試掘を含めて多くの地点から出土している。出土遺物からは隣接する遺跡、山本前田窯跡や日吉神社遺跡との関わり、寺院や瓦窯の存在が暗示されている。各時代の出土遺物は後世に於ける土地への人為的な改変や自然環境の変化を多分に考慮する必要があるだろう。結論は遺跡主体部の調査に委ねるが、林田遺跡等を含めて、物部川左岸の流通を背景として発生した遺跡であったことが想像される。							

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第98集

加茂ハイタノクボ遺跡Ⅱ

県道宮ノ口深淵線緊急地方道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2007年3月16日

発行 財高知県文化財団埋蔵文化財センター

高知県南国市篠原南泉1437-1

Tel. 088-864-0671

印刷 共和印刷株式会社

